

有本真紀先生を送る

有本真紀先生をお送りする

寺崎昌男

(東京大学名誉教授・元教育学科教授)

2007年ごろだったか、有本先生がライフスナイダー館の調査役室を訪ねて来られた。「卒業式のことを調べたい、それにはいろいろな土地の小学校を訪ねて昔の史料を見てみたい、どこか調査先を紹介していただけないか」というご相談である。

すぐに思いついたのが、愛媛県東宇和郡(現西予市)の旧宇和町にある開明学校跡である。明治初期以来の旧校舎が残され、累年の史料が丁寧に整理・保存・公開されている。町を挙げて守り整えていて、長野県の例にちなむと「西の開智学校」とも言うべき小学校遺跡である。

早速知り合いの学芸員の方に手紙を書き、有本先生をご紹介した。先生は早速見学に行って歓迎されたという。そのうえ、改めて町民の方たちへの公開講演を依頼されたというお話しであった。

のちに来た学芸員さんの便りでは、有本先生にまた来ていただいてお話しをしていた上に、ピアノの演奏まで披露していただいたとのこと。「すばらしい先生をお引き合わせ下さって、心から感謝しています」という話であった。

実は私は、その町全体をあるご縁から知り、

監修者を務めていた小学校教科書の『新しい社会』4年生の巻に、「文化の町をつくる」という単元の地域教材として取り上げさせてもらっていた。その影響からか、四国一円からの開明学校跡の見学者が急増し、町長さんはじめ町の人たちから大いに感謝されていたのだった。

同じ町に、県立博物館やシーボルトの娘が医師として働いた病院跡もあり、もともと文化の町の一つであった。有本先生はそこで歓迎され、演奏まで披露して下さったのだ。お人柄と技量に感謝したのは、紹介した私の方であった。

その次に先生の研究の全姿に接したのは、講談社から出た『卒業式の歴史学』である。読んで感嘆したのは、「史心と史学との融合」のさまである。

付けられた帯によれば、著者は、学校が「感情の共同体」を目指して達成した「卒業式」を「儀式と感情との接合」という視点から取り上げ、その歴史を明らかにすることによって「日本の近代と教育をめぐる新たな視角を提供している」という。

端的なまとめだと思うが、このような視点を設定することができるのは、まさに著者が

丹念に歴史研究を進めただけでなく、音楽家であったからにはほかならない。『『私たちの感情』へ捧げる歌』と副題された第六章「卒業式歌」の小見出しを拾ってみても「卒業式歌の現在」「唱歌教育の命運をかけて」「愛国歌《蛍の光》」「《蛍の光》と『同情』」「かたみに思う」「テキストの扱いをめぐって」「斉唱という行為」というように構成されている。どれを見ても本格的な音楽的素養がなければ成り立つ視角ではない。

教育学・教育史の世界では、「卒業式」のようなテーマは「学校儀式」というカテゴリーのもとで研究されてきた。道徳教育や音楽教育のような教育課程内の領域ではなく「学校経営」に属し、歴史的研究の対象としてはもっぱら「小学校」の枠で論じるというのが通例であった。しかし有本先生は、儀式としての

卒業式を「課程外の活動」として矮小化するのではなく正面から対象に据えて来られた。そして式典に不可欠の「音楽」あるいは「唱歌」への素養、さらに子どもたちを初め式典参加者たちの「感情」という視角を設定し、式典を子どもたちの文化的成長の一節として取り上げる新研究を積み上げて来られた。しかも北澤毅先生たちとの共同による感情研究の方法論が歴史研究の中に巧みに生かされている。先生の研究者としての成長にとって立教大学での28年間は決して無駄ではなかったであろうと思われる。

長い音楽指導に対して元同僚の一人としてはるかに感謝申し上げるとともに、研究の成果を心からお祝いしたい。今後、先生の「史心」はどのような研究対象に向かうだろうか。楽しみに待たせていただきたいものである。

学科の象徴的存在

前田一男

(立教大学名誉教授・元教育学科教授)

立教の教育学科は、初等教員養成課程を持っていることに大きな特色を持っている。というより、小学校教員の養成を目的に設けられたのが教育学科だった。その後、教育学課程が併設され、さらに大学院博士課程後期課程まで設けられるまでに充実していった。その点では初等教員養成と教育学研究とをどのように有機的に繋げていくのか、学科創立当初からの課題であり続けてきた。そのような学科にとって有本先生は象徴的な存在だった。

まずは音楽担当の専任というお立場から、初等教育課程を支えていただいた。未経験者

から音大レベルまで経験格差が大きい音楽指導において、暖かかくも厳しい指導のありようを何人もの男子学生から聞いたものだ。打楽器奏者をゲスト講師で招かれ、その公開授業を参観させていただいたが、演奏そのものが何よりの感化力になることを実感したものだ。音楽科教育法の大学テキストも編集されており、実践的な関心が高いようにお見受けしていた。学生一人ひとりの個性もよく理解しておられた。その意味で最近のコロナ禍でのご苦労は想像するに余りあった。

ゼミでの学生指導もご熱心だった。特筆されるのは2006年3月、ゼミ合宿を新島村若

郷に実現されたことだ。全校児童 13 名の若郷小学校に赴任していた卒業生を仲介者にして、鳥の教育関係者と子ども教育の原点を学ばれた。学生によるミニコンサートも開催され、児童のみならず村民も参加してのコンサートは、とても心温まるものだったと聞いた。八王子のセミナーハウスでのゼミ合宿もしばしば開かれていた。昼はレヴィ・ストロースの文献で学生を鍛え、夜は斗酒猶辞せずほどではないにしても、お酒を介して学生との楽しい語らいもあったことだろう。卒論が選択になってしまっただけから、3年ゼミから卒論ゼミへの継続者率が高く、各人の卒論を集めた論文集を作成されるなど、まとまりのよい卒論ゼミは羨ましかった。大学院でも博士学位取得に向けての院生指導を粘り強くやり遂げられた。

前述の通り、象徴的存在と書かせていただいたのは、研究的な志向を強く自覚しておられたからだ。着任されてすぐに、その決意を学科メーリングリストでいただいた記憶が鮮明に残っている。研究関心の力点は、音楽教育での評価やカリキュラム研究から、学校教育を成立させている「学校的なもの」を明治・大正期の史資料を用いて明らかにする歴史社会学へと移された。名著『卒業式の歴史学』（2013年）を上梓されたが、たしかに天皇制公教育にまつわる儀式への注目はあっても、それ以外の儀式には無関心であった日本教育史にとって、卒業式は重要でありながら手つかずの対象であった。卒業式の季節には

NHK「チコちゃんに叱られる」にテレビ出演され、卒業生の間でも話題になっていた。懇意にされていた北澤毅先生とともに科学研究費の成果報告書も共同作成され、研究は「怒り」から発するという名言も残されている。引き続き、歴史の中に「個性」や「小学1年」の意味を再解釈していただければとご期待申し上げたい。

管理運営のお仕事も誠実に責任感をもって取り組まれてきた。とりわけ文学部の2006年改革でのカリキュラム担当の委員としてのご尽力には、当時の学部長として改めて御礼を申し上げなければならない。元学部長が「清新で大胆な文学部改革」を部長会に約束し、前学部長の世界文学科案が教授会を通らず、待ったなしで迎えた学部長時代、それまでの8学科体制から4学科8専修体制にする改革案に向けての教授会運営は苦難の連続であった。そのような中で、史学科、仏文科の先生方と共にカリキュラム面での重要な役割を担っていただいた。教育職員免許法の改正に伴う教育学科カリキュラムや毎年の複雑な時間割配置への丁寧な点検など、実務面での能力の高さによって、学科になくはならない人材として活躍された。

新しく制度化された特別専任教授は辞退されたとのこと、蒲柳の質でいらっしやっただけで今が潮時と判断されたのかもしれない。これからは健康にくれぐれも留意され、ご研究にピアノ演奏に、思う存分楽しまれることをお祈りしたい。

ご定年退職、おめでとうございます

秋葉昌樹

(教育学科教授)

有本先生、このたびはご定年退職を迎えられ、誠にありがとうございます。数年前、教育社会学の前任者の定年退職を受け母校に勤めることになった私にとって、有本先生は実にありがたい存在でした。なぜなら、有本先生は音楽教育の偉大なる教授指導者でいらっしゃるだけでなく、同時に歴史社会学という私とは多少領域は異なるものの、大卒でみれば同じ教育社会学領域の高名な教授でいらっしゃる方だからです。母校に戻った私は期せずしてそうした有本先生の教を直接賜うことができたからです。この上ない光栄なことと感謝しております。常日頃から、先生は研究者としてのみならず教育者、さらには大学人としての正しいあり方をご指導くださいました。私の着任が決まって以来、折に触れお声掛けいただいた際も「わからないことが

あったら何でも聞いてください」とおっしゃってくださったことが大変印象的で心強かった記憶がございます。とは言うものの実際のところは、その後長く続いたコロナ禍の影響で、全学的にオンライン授業、オンライン会議が多用されたことにより、大学でお目にかかる機会はそれほど多くなかったようにも存じます。それは対面授業が再開された2023年度の今に至るまで変わることもなく、時間ばかりが過ぎていってしまったようにも思い、残念でなりません。大学の教員は同じ学科に属していたとしても、さながら個人事業主のような側面があり、そもそもなかなかお目にかかることもできなかったのかもしれないのですが、いずれにしましても、長きにわたり立教でのご指導をまことにありがとうございました。

有本真紀教授の御退職にあたってのお礼と思い出

石黒広昭

(教育学科教授)

御退職おめでとうございます。また一人学科の教員が卒業します。退職制度がある限りこれは避けられないことですが、私にとっては特別な意味があります。私の着任時にいた教員がこれでみな立教を去られることになるのです。着任時にいた人たちというのは私にとって既存の学科の文化や価値を体現されていた方たちです。当時の学科教員は初等教育

のカリキュラムの詳細についてよく知り、学生もよく把握している印象でした。なかでも有本さんは教職に精通した人という印象を受けました。それは法令理解だけでなく、時間割の作成時には常に学生目線から不都合がないかどうか確認されていたからです。大学人として学生の不利益になることはすべきではないという思いが強かったのでしょうか。記録

を調べたところ、有本さんの着任は1996年とありましたが、有本さんが授業で使っているピアノ室（5506教室）の竣工は1980年9月24日だそうです。既に40年を超えています。学科の音楽室が十分ではないという問題は学科会でよく話題に上るものでした。その状態を確認した方がよいということで、学科教員みなで一度音楽室を訪ねたことがありました。多少の備品の整備はできていまだ根本的な問題は解消されず、授業の実施にあたってはご苦労されていたのではないのでしょうか。ピアノが弾けない学生に対する個別指導など、きめ細やかな対応されていたとも聞

いています。初等の多くの学生が、ゼミを越えて有本さんに助けられていたようです。しかし、有本さんは決して「甘い先生」ではありませんでした。卒論面接において、厳しい本質的な問いを投げかけることが多かった印象があります。その一方、学科会では「おやつ」を用意され、場を和ませてもらいました。頼りがいのある同僚が去ることは何とも残念であり、寂しいことですが、今後はポスト立教期を楽しまれることでしょうか。長い間大変お世話になりました。ありがとうございます。

委員会仲間

市川 誠

(教育学科教授)

有本先生と初めてお会いしたのは文学部の委員会であったと思う。立教大学に着任した当初、私は同じ文学部でもキリスト教学科に所属しており、教育学科の教員とお話する機会はほとんどなかった。そんななか有本先生とは早くから委員会の場で顔を合わせていたと記憶している。今でも「会議が多い」という声をきく立教大学文学部であるが、その頃は、委員会の数も回数ももっと多かった。そのなかでも、ほとんどの学科が着任したばかりの者を「仕事を覚えてもらう」という名目で送り込んでいたのが非常勤委員会と教務委員会で、この順番での2年ずつの継続が定番であった。(今では教務委員会の業務に統合されている非常勤講師の人事検討に、かつてはもっと時間をかけており、それだけに専念する委員会が置かれていた)おかげで、他学科教員でも着任時期が近い者同士は委員会

を通じて顔見知りになりやすかった。木曜の午後、当時文学部の研究室があった6号館の3階に並ぶ会議室で開かれる委員会で同席したことがなつかしく思い出される。

2006年私が教育学科に移籍し同僚となつてからは、他の学科メンバーと同様、有本先生の仕事ぶりにずっと感心させられてきたが、なかでも銘記されるのは、学部の音楽教育で多忙なところ、それで手一杯となることなく、大学院教育にもコミットされたことである。6年前からは、それまで学部での授業が多すぎて難しかった大学院の授業も担当されてきた。私が大学院主任を務めたこの2年の間には指導生3名の博士論文提出を果たされた。教育学専攻での提出はこの3件だけであり、専攻と主任の面子を有本先生に救っていただき、感謝している。これまで大変おつかれさまでした。

ご退職の祝辞

伊藤実歩子

(教育学科教授)

有本先生、ご退職おめでとうございます。長きにわたり、立教大学文学部教育学科で音楽教育に従事してこられました。たくさんの教え子たちもご退職をととても残念に思っているに違いありません。近年、文部科学省からの大学の教職課程に対する要求はより一層、厳しく複雑なものとなり、そのたびに私たちは文書の解説や書類の作成に振り回されてきました。そうしたとき、わたしたち学科のメンバーは、学科の歴史や教職課程のさまざまなことにおくわしい先生に甘えてきました。しかし、これからはわたしたちだけで何とかやっていかなければなりません。ありきたりな言い方になりますが、皆で力を合わせて頑張っていくよりほかありません。

「有本ゼミはたくさんの文献を読まされてめっちゃしんどいけど、めっちゃ鍛えられる」

と学生が話していました。音楽の試験がある日には、初等教育専攻の学生は、みなで歌を歌ったり、ピアノの楽譜を見たりして、一生懸命練習していました。しかし彼ら、彼女らは皆一様に先生のことが大好きで、それでめいっぱい頑張っているのだということもよくわかりました。コロナ禍において、全学的にオンライン授業に移行したときも、先生は相当のご苦勞をされ、音楽の実技指導の授業を工夫されていたと伺いました。そうして先生のご指導を受け、鍛えられ、教職で今も頑張っている立教大学文学部教育学科卒業生がたくさん学校現場にいることは、これから学生を送り出すわたしたちとしてはとても心強いことです。

これからもご健康に留意され、ますますご活躍されますことをお祈り申し上げます。

有本先生のご退職に寄せて

柏木 敦

(教育学科教授)

私が立教大学に赴任したのは2021年4月で、有本先生の警咳に接することができたのは三年弱、しかもその一年目はコロナ禍の下、殆どがオンラインでのやりとりだったから、こういう場にもものを書こうとしても書けることは極めて少ないし、長く同僚としてやってこられた学科・専攻の他の諸先生方のような厚みのある材料もない。有本先生の立教大学

での日々の中では新参者に過ぎない私は個人的な思い出を書くことにする。

有本先生がご指導された学生の卒業論文を読む機会があり、いくつか読んだがいずれも水準の高い論文で大変驚いた。単に卒業論文作成のためのノルマとして「調べた」、「書いた」、いう次元に留まらず、書き手が自らのテーマ、そして史料と「対話」、をしているこ

とが見て取れたのである。私は紙背に浮かんだ有本先生の指導のお力に圧倒された。

聞けば有本先生は学生の資料調査に同道して調査の助言をしたり、資料の読解も懇切にご指導されたりしたという。有本先生の下で卒業論文を書いた学生は、高い水準で自らを鍛えて卒業し、社会にはばたいていったものと思う。

また立教小学校では、有本先生のゼミに所属していた卒業生が教員となっておられる。かの先生方が今も有本先生をお慕いし、また

有本先生の教えを大切にしておられる様子を何度か目にした。先の卒業論文のこととも重ね合わせ、有本先生は多くの人を育て、有為な人材を世に送り出してこられたのだと実感した。

「師は針の如く弟子は糸の如し」という。私は平素、`教師、という言葉を経々に用いないようにしているが、有本先生は字義通りの`教師、なのだと思った。短い間だったけれども、そのお仕事を間近で見ることができたのは幸いだった。

ご退職の祝辞

河野哲也

(教育学科教授)

有本先生、ご退職、おめでとうございます。

私が本学に着任したときにいらした先生方が徐々に退職され、今度また有本先生が現場をお離れになるのは、寂しく、とても頼りない気持ちがいたします。私のように、教育学という分野の外で学問を始めて、研究としては必ずしも教育学の中心にはおらず、教職課程に本格的に関わってこなかった人間には、有本先生の教育に関する知識と情熱には、身が引き締まるような気持ちがしておりました。このように申し上げますと、有本先生は、自分は教育学が専門なのではなく、音楽が専門のだとお叱りを受けるかもしれません。しかし先生は、学校教育に対する厳しい批判の目と、学校に対する愛を同時にもっていらっしゃるようにお見受けしておりました。

それは、子どもに対して真摯な態度で、ご自分の情熱の根源である音楽を伝えるのだという使命感にも思えました。厳しさと限りない優しさを備えた先生の教えと態度は、きっと教え子である学生の人生に、特に教員となった学生たちの人生にとって、しっかりとした道標として心に残っているに違いありません。

私は、学部時代に、夢中になって小泉文夫先生の著作を読みました。ほとんど読んだと思います。有本先生は小泉先生から薫陶を受けたと聞いております。退職後、立教教育学会に足を運んでいただき、その話をじっくり聞いていただきたいなと思います。どうぞ、お元気でさらにご活躍くださいますようお願いいたします。

一先ず、惜別

下地秀樹

(学校・社会教育講座教授)

有本先生
長い間、ご苦労様でした。勤務をまっとうされること、心よりお祝い申しあげます。

先生のご退職により、教育学専攻には僕より以前に本学に着任されていた方が、とうとう一人もいなくなりました。僕もほどなくして定年を迎えます。

僕が着任した当時は、まだ池袋キャンパスにしか学部学科がなく、文学部教授会に女性教員は、先生の他には、いまはない文学部から去った心理学科にもう一人おられたのみで、啞然とさせられたことを、まるで昨日の

ことのように思い出しています。しかし、随分、時間が経った、それが現実なのですね。そして、キャンパス内の景色も大きく変わったように思います。

先生には専攻内に限らず、いろいろなところでお世話になり、助けていただきました。奇妙なこと、悔やまれることもあったかもしれませんが、いまは楽しく思い起こされます。

正直、寂しくなりますが、これからまた人生を存分に謳歌されるよう、僭越ながら、祈念いたしております。

ありがとうございました。

有本先生へ

中村百合子

(学校・社会教育講座教授)

有本真紀先生の細部まで心配りのされたお仕事ぶりに私が助けられたことは、一度や二度ではございません。また私が気づかないままに助けていただいていたことが多くあるだろうと思います。有本先生との具体的な思い出を書こうとしますと、私の仕事上の課題を掘り下げなければいけなくなるので、それはここではできませんが、しかしこのように短くとも有本先生にいかに感謝しているかはお

互いの間では通じあい伝わるものと思います。改めまして心より、厚く御礼申しあげます。もちろん、有本先生の新たなご生活の充実を祈念するものですが、有本先生が指導された卒業生・修了生たちの活躍がこれからますます広がってきましょうから、それも楽しみにしております。この後は、大学の外でお会いする機会をいただけるようでしたら嬉しいなと思っております。

有本先生のご退職に寄せて

奈須恵子

(学校・社会教育講座教授)

有本先生の本学へのご着任は、私の着任の2年前とのことで、20数年間、様々な機会に、先生を頼って（本当に頼って）仕事をしてきました。学内の委員会・業務でご一緒することも多く、有本先生の的確なご指摘に何度も助けられましたし、有本先生のお仕事の速さと正確さは学部を超えて鳴り響いてきました。また、教育学科と教職課程のそれぞれの担当教員として、2020年度にCOVID19対応として、急遽、介護等体験を代替措置にせざるを得なくなった際、有本先生が初等の学生用にご用意くださった資料を、ほぼそのまま私が講座教職課程の学生用にも活用させていただくといったこともあり、苦しい時に助けていただいたという実感を今でも鮮明に覚えています。

そのように、助けていただいたという数々の記憶とともに、何より私が有本先生について思い浮かべるのは、教育、研究に対する誠実さ、です。有本先生の歴史社会学によるご研究は、膨大な史料を、まさに足で稼いで積み重ねてこられた調査に基づくものだと拝察

しています。紙に記録された学校史料群の調査や、さらには「唱歌」教育を実際に経験された方たちへの聞き取り調査など、おそらく気の遠くなるような根気強さで研究を続けてこられたことを、有本先生のお話を通して知ることがしばしばあります。有本先生が歴史的研究を本格的に始められたのは、本学に勤務されるようになってからだと同っています。ご自身の問題関心や研究対象を広げるだけでなく、それを実際の研究成果として具体化されてきたこと自体、有本先生の超人的な努力によるものであることは想像に難くありません。また、そうしたご研究は、有本先生だからこそ可能になった研究でもあるということも確かなことだと思います。

有本先生のご退職されると寂しくなるなあ、というのが率直な思いですが、先生のご研究活動はおそらくこれからも続くものと思えますし、そうあってほしいと願っています。先生のご研究のこと、またお聞かせください。楽しみにしています。

有本先生へ

森田満夫

(学校・社会教育講座教授)

有本先生との出会いで印象的な出来事があります。たしか私が赴任直後2010年の新任者歓迎会（宴席）でした。私の前任校が沖縄

県にあったこと、有本先生のご専攻が音楽教育研究であったこともあったためか、アイヌ・琉球に対する近代日本の差別的同化政策

を象徴的に示す 1885 年『蛍の光』歌詞—「千島のおくも おきなわも やしまのうちなの 守りなり いたらんくに いさおしく つとめよ わがせ つつがなく…」に話題が及びました。列強に対する近代日本政府の帝国主義的な目的として、アイヌ・琉球の人々を「日本人化」していく唱歌教育の役割についてあらためてご教示していただく機会となり、深く考えさせられました—「皇国の北門」の蝦夷地は「北海道」へ、「南門」の琉球は「沖縄」へ、対外的対抗関係から同化・皇民化する近代日本政府のねらいを一。

その後、ご一緒したのは文学部教授会・専

攻会議・院入試・修士論文口頭試問などでしたが、大学人としての良識ある言動・気鋭の教育研究者の印象が残っています。

有本先生へ

先に述べた通り、アグレッシブで気鋭な若々しい有本先生の印象のためでしょうか。私と同学年であったことに本当に驚いています。

立教大学でのお勤め、本当にお疲れさまです。

今後とも、研究者としていっそうのご活躍を祈念しております!!

類は友を呼べたのか

和田 悠

(教育学科教授)

最初にお会いしたのは採用面接の時。「社会教育を担当したことがないのにそれを教えることができるのか」とのやや意地悪な質問がある教員から飛び出し、「そうであるからこそ、既成の社会教育の枠を問い直すことができるし、自分なりの社会教育を創っていきたい」との主旨の返答をした。その返答に、有本先生が強く頷いてくださったのが印象に残っている。その時に私は、伝わったと思った。

『卒業式の歴史学』のあとがきにある、「自分でやるしかない」、「自己流の試行錯誤の連続」という言葉は印象的である。卒業式に対する自身の違和感を出発点に、その感情を実感として固着させるのではなく、「経験」として捉え返し、その社会的・文化的構造を問い直すところに、極めて主体的契機の掛かっ

た「価値自由」の学問実践である、有本流「歴史社会学」という営みを打ち立てた。我より祖となった独創的な研究者でおられる。

本書の最後の註にある、「だが、教育の歴史に残ることなく、残すことなく、それぞれの生を歩んだ人たちへの視座を失ってはならない。自戒として記しておきたい」という文章には、有本先生の神経の行き届いた個性が、しっかり枠組を作り、そこに納まりきれないものをも拾おうとする「評価」の発想と論理が、よく現れている。裏を返せば、無神経なもの、場を占有する図々しさ、根柢の希薄な平たい評価を嫌った。

私に関わっている歴史教育者協議会の関連で、多くの講演や執筆の願いを受けてくださった。実践的で総合的な教科教育学は、その取り組み方次第ではアカデミズムを問い直

すことになるとの「民間」教育学の思想があったようにも思う。有本先生は中内敏夫に私淑されてもいた。

学生を本気で鍛え、卒論指導を大事にして

いた有本先生。その姿勢を受け継ぎ、教育研究にあたることで有本先生への義理を果たしたい。どうかこれからもお元気でいてください。これまでのご支援に感謝申し上げます。

11年後の謝罪

渡辺哲男

(教育学科教授)

2012年の秋、『翔んで埼玉Ⅱ』でにわかに注目されている琵琶湖のほとりに暮らしていた私に、突然、立教大学教育学科長の有本真紀と名乗る人物からメールが届いた。電話で話をしたいという内容で、突然のことに動揺しつつも、日時を指定して研究室に電話をかけていただくように返信した。そして数日後、私は大学で授業を終えた後、電話の時刻まで少し時間があったので、研究室の掃除を始めた（私の趣味は掃除である）。掃除を終えて落ち着いたところでちょうど約束の18時。そろそろかかってくるかなと思っていたが、待てど暮らせどかかってこない。

あれおかしいなと思って電話機をみたところ、電話線が外れてしまっていた。先ほど掃除した時にやってしまったのだ。しまったと思いつつ慌てて線をつないで待っていると、ほどなく電話がかかってきた。出るなり、「繋

がらなかったですよ。出られなくてすみません」と謝ったのだが、電話の向こうの有本学科長は「いえいえ」と意に介していない風であった。多分別の電話がかかっていたと思ってくださったのだろう。しかし電話が繋がるまでに約束の時間から10分以上要しており、恐らくは何度もかけ直して下さっていたのではないかと不安な思いをさせてしまっていました、と今更ながらお伝えしたい。

この私のそそっかしさは、あれから11年経った現在も相変わらずである。有本先生の学科における役割のいくつかは私なりに引き継ごうとしてきたつもりだが、このそそっかしさが、完全なる有本イズム継承を妨げている。この点はやはり申し訳ないのであるが、お詫びかたがた、出会いの頃を懐かしみながら、そのうち一杯やりましょう。